

ESDの国際協力とは？

国際基督教大学
代表者 北原和夫

自己紹介

- 専門: 非平衡系統計物理
- 国際経験: ブリュッセル自由大学博士、その後MIT研究員
- 2002-3物理学会会長、2003-2005学術会議会員、現在同連携会員
- IUPAP(国際物理学連合)の委員として2005年Durbanでの"Physics and Sustainable Development"に参加
- 「科学技術の智」プロジェクト Sustainable Democratic Societyのための科学技術リテラシー構築、Traditional Knowledgeの中に持続性の可能性を求める「日本の智慧」→「アジア・アフリカの智慧」構築の可能性
- 現在、日本学術会議大学の分野別評価検討委員会(日本の学士力の構築)

目的

世界のグローバル化と世界の持続性 人々が移動し通信するグローバル化の時代においては、一国一地域の動きが全世界に影響を及ぼす。世界の国・地域が協力して対応することでしか、世界の持続性が保証されない。

ESDの基本 全く条件の異なる自然や社会の中にある人々が共有できる知や技の素養を見いだし、実際に教育プログラムの中に実装することが持続性のための必要条件である。

先進国:20世紀型産業化に対する反省、自由競争に対する規制、技術革新による解決のための人材育成

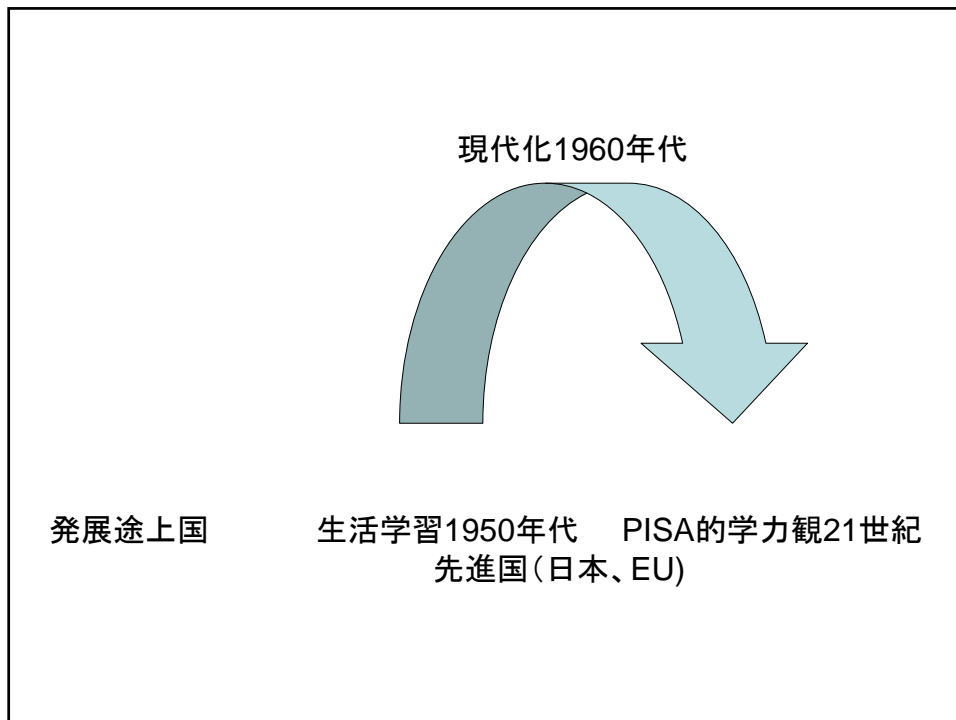
後進国:まず国家としてサバイバルできるかどうか、産業化し、社会的安定化のための人材育成

したがって、真に世界の持続性のためには、人材育成のゴールの共有とともに、おかれた自然・社会状況の差異に関する相互理解がESDの根幹である。

学習・学力観に関する動向

- 日本の学力観の変遷 1950年代「生活学習」理科、技術、健康などが一体となって教育されていた。1960年代「教育の現代化」学問の枠組みと構造に近い形で教科指導、高度成長につながるとともに、「理科離れ」を起こす。2006年PISA調査を踏まえて科学リテラシーの考え
- 先進国:2000年頃からPISA的学力観、enquiry-based、outcome-based etc. 考え方、生活や技術との繋がりを重視
- 発展途上国:技術(産業)、社会(文盲、貧困など)の課題への挑戦、生活重視

ある意味で、先進国(日本を含む)と発展途上国は同じstand pointにある。対等なESDの可能性。



高等教育

- 高等教育も先進国で変遷している。
- 欧州型の研究中心大学から、市民育成型高等教育
- どのような社会を創出するか、という問と市民育成型教育のゴールは直結する
- 「高等教育のゴールは？」
日本:「学士力の再検討」
英国:QAAによる大学のベンチマークoutcome-based
- 社会のゴールとしてsustainable democratic societyを考えると、先進国と発展途上国が高等教育において対等に協同できる可能性

ESD Consultation Meeting 2009-2011計画

2009年2月25-27日, 国連大学

- 顧問メンバー: 長尾(ICU), 松岡(早稲田)、味の(東大)、北原(ICU)、Gyasi(ガーナ大)、Otieno(ケニヤ大)、Petersen(ケープタウン大)
- 修士レベルの大学間教育ネットワークの構築
- 標準ESD教程の開発
- 二、三の国でパイロット授業を試行
- 評価を行う

南ア派遣

2009年2月28日—3月7日日本側派遣団

国際基督教大学教員1名、事務局スタッフ2名、おおさわ学園教諭3名、映像担当者1名

UCTならびに現地学校を視察訪問して、南アの現状把握、ESDモジュール開発に関する今後の共同作業の在り方を検討。



南ア訪問の報告

- 2/28成田発 3/1ケープタウン着
- 3/2 ケープタウン大学School Development Unit訪問、開発教育ゼミ



3/2 Rockland小学校訪問

- Rockland小学校SEEDプロジェクト: 持続的農法、学びのゴールを設定する教育



3/3 Levana小学校

- ESD=Networkの考え方: 自然と人間、人間と人間のネットワークをつくることだ



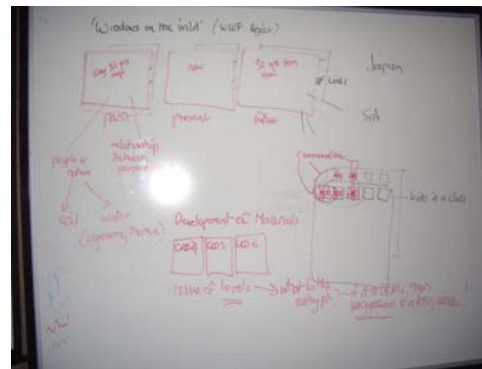
3/4

Stellenbosch持続可能性研究所

- ここでは、Stellenbosch大学の機関として、実際にsustainableな町づくり、教材開発を行っている。大学院教育
- 持続性農業、再生可能エネルギー、開発政策、経済などの総合的かつ実際の教育

3/5総合討論と懇親会

- UCTスタッフ、学校教員、政策担当者(文科省、環境省)集合



初等中等教育における ESDへの考え方

- 人と自然、人と人の調和ある関係の持続による民主的持続的世界の構築を、将来の子どもたちに託す。
- ローカルな課題に取り組む中で、グローバルな持続性を創出する。
- 現在の自分のまわりを見るとともに、過去の状況を調べ、将来の在り方を考える。その際に、それぞれの伝統智を重視する。
- ITCを通して、言語・文化の障壁を超えて、両国の子どもたちが、知識、経験、ビジョンを共有する。